

Title	鈴木公雄君提出学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.2 (2001. 2) ,p.167(315)- 174(322)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20010200-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鈴木公雄君提出学位請求論文審査要旨

論文題目「出土錢貨の研究」

論文審査の要旨

本論文は日本全国から出土した錢貨を集計し、中世から近世にかけての錢貨流通史の復元を試みながら、その歴史的、経済史的意義を検討することを目的としている。全体として三部からなり、第一部では出土備蓄錢、第二部で出土六道錢の考古学的分析をおこない、第三部でこれを総合して従来の貨幣経済史研究などの成果をふまえつつ、中世から近世初期にかけての錢貨流通の実態を解明し、終章で宗教的な六道錢・念仏錢・題目錢などに触れるという構成を取る。

序章 出土錢貨研究の目的

- (1) 経済活動復元の資料としての出土錢貨
 - (2) 出土錢貨の定義と種類
 - (3) 出土錢貨の考古学的資料整備・分析
 - (4) 出土錢貨による中・近世貨幣流通史の復元
- 第一部 出土備蓄錢
- 第一章 出土備蓄錢の研究史

(1) 出土備蓄錢の発見史

(2) 戦前の出土備蓄錢研究

(3) 戦後の出土備蓄錢研究の進展

(4) 出土備蓄錢研究と中世経済史

(5) 近年の出土備蓄錢研究の動向

第二章 出土備蓄錢の集成と概要

(1) 出土備蓄錢の集成

(2) 出土備蓄錢の錢種構成

(3) 最新錢による備蓄錢上限年代の設定

(4) 備蓄錢の出土状態と埋蔵方法

(5) 出土備蓄錢の歴史地理

(6) 備蓄錢の出土記録と資料的信頼度

第三章 出土備蓄錢の時期区分

(1) 大量錢貨埋蔵風習の成立時期

(2) 出土備蓄錢の時期区分と実年代

(3) 各時期の出土備蓄錢の分布

(4) 出土備蓄錢各時期の特徴

第四章 出土備蓄錢錢種組成の考古学的分析

(1) 全出土備蓄錢の錢種組成とその数量比

(2) 上位二〇種錢種組成の分析とその時期別変化

(3) 永楽通宝の東日本への集中

(4) 出土備蓄錢の考古学的分析結果の要約

第二部 出土六道錢

第一章 六道錢とは何か

- (1) 六道銭の習俗
 - (2) 出土六道銭の発見史
 - (3) 考古学資料としての六道銭
- 第二章 出土六道銭の集成と概要

- (1) 出土六道銭の枚数
- (2) 出土六道銭の銭種構成
- (3) 出土六道銭の集成と銭種組成

第三章 出土六道銭の考古学的分析

- (1) 六道銭のセリエーション分析
- (2) セリエーション分析の手順
- (3) セリエーション分析の結果と解釈
- (4) 各地域のセリエーション・パターンの比較

第四章 セリエーション分析結果の検討

- (1) セリエーション分析の妥当性について
- (2) 一〇枚以上の六道銭によるセリエーション分析
- (3) 単一銭種完全セットの六道銭
- (4) 出土六道銭の考古学的分析結果の要約

第三部 出土銭貨から見た中世後期～近世前期の銭貨流通

第一章 中世銭貨流通の諸段階

- 銭単貨体制の成立・展開・破綻 —
- (1) 精(清) 銭体制の成立と展開
- (2) 精(清) 銭体制の確立
- (3) 清(精) 銭体制の破綻と撰銭令
- (4) 撰銭令からみた中・近世の銭貨流通

第二章 永楽通宝の超清(精) 銭化と東国集中

— 銭単貨体制の維持 —

- (1) 中世史料にみられる永楽通宝の超清(精) 銭化
- (2) 出土銭貨の分布からみた永楽通宝の東国集中
- (3) 永楽銭基準通貨圏

第三章 幕初期三貨体制の成立

— 単貨体制から複貨体制へ —

- (1) 永楽通宝の流通停止と鑿銭公用通貨化
- (2) 慶長金銀の発行と領国銀
- (3) 幕初期三貨体制成立の背景

第四章 渡来銭から古寛永通宝へ

— 銭貨における近世の成立 —

- (1) 十七世紀徳川幕府の銭貨政策
- (2) 古寛永通宝の発行と渡来銭の回収
- (3) 東海道宿場史料に見る新旧銭貨の交替
- (4) 古寛永通宝の始鑄と幕府銭貨政策
- (5) 寛永銅銭から寛永鉄銭へ
- (6) 中世後期～近世前期の銭貨流通の要約

終章 出土銭貨研究の地平

— 念仏銭・題目銭と六道銭 —

- (1) 六道銭と貨幣類似品
- (2) 念仏銭・題目銭の集成
- (3) 念仏銭・題目銭の使用年代
- (4) 六道銭と文献記録

(5) 埋葬習俗としての六道銭

(6) 出土錢貨研究の地平

あとがき

参考文献

以下、本論文の構成に沿ってその要旨を記す。

第一部の「出土備蓄銭」においては、まず、その発見の端緒から今日にいたるまでの研究史をたどり、問題点を整理する。

従来、好事家の関心や古銭学の対象であった出土貨銭は考古学的研究によって数量的に処理され、年代観が追求されるようになった。大量の模鑄銭鑄型の出土によって、模鑄銭生産の規模と内容の解明がなされ、精銭・悪銭の実態、撰銭令の実態解明の手がかりが得られるようになったこと、また東アジア世界における錢貨流通などの研究の進展が見られたことをあげ、本研究は、それら文献史学や考古学の学際的な出土錢研究の延長上に位置づけられるとする。

ついで、考古学資料として出土した全国の備蓄銭を集成し、本研究が最終的に目指す中・近世における錢貨流通の動態を究明する際の基礎データを整える。一括一〇〇枚以上を出土した二一七例の資料について、錢種の組成を分類し、最新銭による埋蔵の年代上限の吟味をおこなった結果、備蓄銭が埋蔵されていた期間は十三世紀後半から十六世紀末にわたることを明らかにするとともに、論者はこの約十三世紀半以上に及ぶ期間を八期に区分する。本研究において出土備蓄銭の構成錢種の数量的比較が検討できるような統一的分析方法を導入し、それにもと

づいて、それぞれの期に示される錢種組成の特徴は当時の流通錢の一般的状況であり、中世全体を通じて備蓄銭の錢種構成に一定の均質性が認められること、中世の後半になるにつれて永楽通宝が高い割合で出現し、基準銭となつていった事実などを指摘する。備蓄銭のもつ歴史的性格をまとめると以下のようになる。

(1) 備蓄銭は日本列島の広範囲に分布すること。(2) 備蓄銭を収めた容器の相違は錢貨の利用状況を示し、一〇〇文ないし一貫(一〇〇〇文)単位を「さし銭」とした状態は、そのまま当時の錢貨の流通状態を示すこと。(3) 備蓄、蓄藏目的のために隠密裡に埋蔵されたものなかには、祭祀的な目的をもつものがあるが、そのすべてが呪術的埋納銭とするとは考えられない。(4) 埋蔵の目的は問わないでも、それらを錢貨流通の資料として差し支えない。(5) 埋蔵主体・埋蔵地域の分析の必要性があり、寺院の祠堂錢金融との関係を注目する。(6) 備蓄銭埋蔵の風習は十三世紀後半から十六世紀に及び、それを八期に時期区分することが出来る。(7) 全備蓄銭の錢種は一六〇種、その九五%は上位五〇種で、これらは後北条氏のいう「精銭」に当たること。(8) 錢種組成の変動は、上位二〇種においては三期出現の洪武通宝、五期出現の永楽通宝を除く他の北宋錢の変化は見られないことから、これらが「精銭」に当たることを裏付ける。(9) 二〇錢種中、永楽通宝は六期以降一位に、洪武通宝は六期以降六位に進出する。これは永楽通宝の高い評価と関連する。(10) 永楽通宝は近畿地方では存在が

希薄であるが、関東では永樂通宝が上位の基準銭貨となった。

第二部の「六道銭」においては、まず六道銭とはいかなる習俗であり、いつ頃出現したのかを、考古学、文献史学、民俗学の分野からとりあげる。六道銭は中世後半から近世にかけて行われた浄土信仰にからむ広範囲にわたる埋葬習俗で、銭六枚を中心に墓に埋納されたものである。今日、考古学資料としての六道銭は中世から近世にかけて用いられたかめ棺、早桶、方形木棺、火葬墓、土坑墓、大名墓など各種の墓に副葬品として発見される。本論ではこれらについて地域別に集計し、そこに用いられた銭貨の組み合わせを明らかにする。一墓あたりの枚数は六枚を中心にはらつき、中世の六道銭においては、出土備蓄銭と同じく北宋銭を中心とした各種の渡来銭が存在し、近世になると幕府が鑄造した各種の寛永通宝が用いられるようになる。それらの組み合わせの変化を通して、近世初頭における銭貨流通の実態を明らかにしようとする。

資料として江戸府内で出土した完全セットの六道銭を用いてのセリエーション分析を行った結果、渡来銭が主流の時期から古寛永通宝が中心の時期を経て、寛永通宝（文銭）が増大し、寛永鉄銭の使用が始まるなどを目安に十八世紀前半までを五期に区分する。その傾向には全国的な斉一性がみられると結論づけている。

論者は銭種の組み合わせにみられるパターンにはその当時の銭貨の鑄造量・流通量が反映されているとみなすことが出来る」と主張し、セリエーション分析の結果が江戸幕府の貨幣鑄造や

流通状況とどのように関係するかを検討する。セリエーション分析の結果にみられる特徴的な傾向、すなわち渡来銭と古寛永通宝の組み合わせが少なく他と比較して断絶的であることは、幕府が一六三六年に鑄造した古寛永通宝が、中世以来使用され続けてきた渡来銭を急速に駆逐し、いつた過程を示すものであり、それが全国的な政策的働きかけによって行われたことを示すと主張している。

第三部「出土銭貨から見た中世後期～近世前期の銭貨流通」では前記の一部および二部において行った資料分析の結果に基づき、銭貨流通の実態の解明に迫る。

中世の銭貨流通は、古代や近世と異なり、国家権力で保証されたものではなく、市場原理や使用する人々の慣行に支えられていた。第一章「中世銭貨流通の諸段階」ではそうした中世独自の経済のありかたの中から、銭が米や布に代わる決済手段として選ばれていく過程、さらに撰銭令という形で政治的解決がはかられていく中世末から近世初頭の銭貨流通の実態を、出土銭貨の時期と照らし合わせて考察している。ここではまず「均一性」および「価値の保蔵機能」といった通貨の機能面から、備蓄銭一期～二期までを、銭貨体制の成立・展開期ととらえ、さらに三期～五期までの備蓄銭の高揚期を、銭貨体制の確立期ととらえる。このうち均一性の保持とは、銭貨が米や布に代わって広域地域間の決済手段となるために重要な要因であり、一期から鉄銭を含む例がきわめて少ないことから、銭貨の品質の均一化を達成する方法、すなわちすでに撰銭慣行が存在して

いたという見解を表明している。またこのころ盛んな金融業者の出現、礼銭の盛行などから、機関や組織または個人が、常に一定の銭貨の備蓄を必要とする経済的な環境があつたことを指摘している。

つぎに備蓄銭六期以降を、精(清)銭体制の破綻期ととらえる。その理由として、備蓄銭に占める永楽通宝の量が増加傾向にあつたことをあげている。加えて十六世紀以降、模鑄銭関連の遺物のみが純粹に出土する傾向にあり、現実の流通界において超精(清)銭である永楽通宝の減つた分、模鑄銭・無文銭への依存度が高くなつたことを物語る証拠としてしている。ここではとくにこの時期、頻繁に発令されるようになった撰銭令に注目し、使用される文言から銭貨の形状・破損状態・系譜関係を明確にすることにより、撰銭とは忌避されるべき銭貨という意味に加えて、精銭のみを使用することも禁じる両義的な意味が含まれているという、新たな解釈を提示された。

第二章「永楽通宝の超精(清)銭化と東国集中」では、十六世紀後半、渡来銭のなかでも、永楽通宝が特殊な存在として位置づけられていく状態を「超精銭化」としてとらえ、それが東国において顕著にみられる銭貨流通の特質について、出土銭貨の分布とともに考察する。ここではまず前章で触れた備蓄銭六期以降の精銭体制の破綻期の内容を、視点を變えて具体的に検証している。事例としては、結城氏・徳川氏・後北条氏ら戦国大名が発令した文献史料に依拠して、永楽通宝の超精銭化現象の実情と、これと対極的に鏹銭という近世に連なる貨幣名称の

多用がなされた結果、精銭自身の相対的価値の下落がはかられたことを指摘する。さらにこの状態が東国地方においてより顕著にみられる証拠として、出土備蓄銭に占める永楽通宝の構成割合の高さ、および出土六道銭の永楽銭単一完全セットの集中をあげ、考古学的な側面からこれを実証している。

このように永楽通宝を基準銭貨とする地域的流通圏が形成されるいっぽうで、そこに新たな限界が生じていた。すなわち永楽通宝そのものの、絶対量の不足という点である。このことは、永楽通宝がその価値の高さとは別個に、近世も含めて日本全国の基準通貨として存在し続けることができない決定的な要因ともなっていた。論者は、これを永楽通宝のみで構成される「さし銭」が存在しないことをもって実証し、この限界が江戸初期の永楽通宝の流通停止につながつたとしている。

慶長六年(一六〇一)、江戸幕府は日本で初めて統一的な金銀貨幣を発行した。しかしながら銭貨が発行されるのは、それより約三〇年も後のことで、幕初期は依然として金銀の公用通貨に中世以来の銭貨が混在しながら流通していた。第三章「幕初期三貨体制の成立」では、江戸時代初期、金銀貨幣発行に並行して、中世以来の銭貨体制がどのような状態で貨幣流通界に取り込まれ、金・銀・銭からなる三貨体制の基本が成立していったかを考察している。本章で論者は、慶長十三年(一六〇八)から十四年にかけて、江戸幕府が発令した銭貨流通に関する法令に着目している。これによると、永楽通宝の価値は鏹銭の四倍とされながらも、絶対量不足にあつた永楽通宝の流通が

停止され、金一兩〓鏹四貫文という交換レートが示されている。かつてこの事実だけが漫然と受け入れられていた条文であったが、本論では(1)永楽通宝による資産保持者の保護がはかられた(2)流通量の優れた鏹銭の公用通貨化が確定した(3)鏹銭が金貨にリンクする形で三貨体制が成立したと積極的な解釈を試み、とりわけ(3)を重視して、価値の下落した鏹銭に流通上の信用が回復できたという新たな解釈を提示した。

このように銭と金貨の関係が明確化された反面、幕府は銀と銭との関係については、その換算比率を明記しないなど、ほとんど法的な規定をしなかった。この点について、幕初期以前から銀を価値保蔵手段としてきた西日本地域においては、永楽通宝のような基準銭貨が現れ出現することなく至ったもので、銭貨流通の地域的特徴からくるものであるとしている。したがって幕初期三貨体制を、金本位制を意図して成立させたとする見解には賛同しがたく、むしろ金・銀・銅の三貨が独立した貨幣として機能する複貨体制とも呼ぶべき性格を持っていたと述べている。

一六三六年、江戸幕府は初めて寛永通宝の鑄造に踏み切った。古寛永通宝と称されるこの新貨は、後年発行される文銭や新寛永通宝に比して、銭貨流通にさほどの影響を与えるものではなかったという理解がなされていた。加えて古寛永通宝発行後も渡来銭の流通が停止されなかったことから、このころの銭貨に対する幕府の政策を消極的にとらえる学説が有力であった。第四章「渡来銭から古寛永通宝へ」では、これに批判的検討を加

え、幕府の意図的な政策によって渡来銭がしだいに駆逐されるなど、新貨発行の背景に積極策がなされていたことを重視し、ここに「銭における近世の成立」がなされたと高く評価している。本章は、まず古寛永通宝鑄造に至るまでの背景を考察し、流通界で公用通貨化された鏹銭が、現実の流通界において時として取引拒否という事態に陥っていたこと、このころ銭高現象から銭貨の供給不足をきたし、参勤交代制の維持に不可欠な宿場経済の安定化がのぞまれていたことなどを指摘する。このうち特に銭貨が大量に流れる宿場関係の史料に注目し、古寛永通宝発行後、金銭相場の両替差益を利用した巧妙な政策について分析する。すなわち金高銭安現象に際して、幕府は金貨を宿場へ貸付けてこれを銭(新旧貨)で回収し、市場から銭貨(特に旧貨)の吸収をはかつて銭高現象を招来させ、ついで大量の銭貨(新貨)を貸し付けて金貨で返納させ、古寛永通宝の流通市場への普及と宿場救済の両面を、放出した金貨を回収しながら達成した事実を確認する。

加えて発行された新貨は精銭であるにもかかわらず、幕府が旧貨の使用を停止せず等価使用を令達したため、これが結果的に流通界からの鏹銭追い落としとなり、市場からの旧貨駆逐に拍車をかけることになったと分析する。渡来銭から古寛永通宝使用の時代が、幕府の政策という強行的かつ人為的な手段によって急激に到来したとする仮説は、出土六道銭のセリエーションの手法で分析した結果からも証明されるという。

最後に一種の貨幣類似品ともいえる念仏銭と題目銭を終章

「出土銭貨研究の地平」においてとりあげ、それらが伴出する銭貨との関係からみて十七世紀の中頃から十八世紀の前半にかけてという、かなり限定された期間に製作され、使用されたことは確実であるとしている。六道銭が本来、副葬品であったことから、埋葬習俗と貨幣との結び付きについて議論を展開させている。

以上、各章で取り扱われている内容を概観したが、次に、本論文についての評価を述べる。

本研究の最も特色とするところは、遺跡出土の大量の備蓄銭や六道銭を厳密に資料化し、中世貨幣流通史の諸段階と近世への移行を解明した点にある。出土備蓄銭や六道銭は中世から近世にかけてのわが国の貨幣使用の実態を示す資料であるにもかかわらず、中・近世経済史、貨幣史の研究にほとんど利用されてこなかった。それは、これらの出土銭貨の多くが、考古学的な資料の状態のままにおかれたために、他の分野の研究に利用しにくい状況にあったからである。本研究の功績はそのような欠陥を是正すべく、出土銭貨の全国的な集成を行い、その内容を各種の銭種毎に分類し、出土状況、所属時期、埋蔵形態などの考古学的な属性を整理したうえで集計し、考古学以外の多くの研究者が利用できるようなデータベースを作成したことである。これらの基礎作業にもとづいて、従来の中・近世貨幣経済史などの成果と対比させつつ、わが国の銭貨流通史を復元した。その結果、中世の銭貨による単貨体制から、近世の金、銀、銭三貨体制への移行は、従来言われてきたような、徳川政権によ

る画期的な政策というより、中世から引き継いだ銭貨体制に存する東西日本の地域差異をいかに克服し、東日本と西日本の貨幣流通の円滑化をはかる過程のなかから生成されたことをあきらかにした。

このように、本研究の最も評価されるべき点は、出土銭貨のデータベースの作成と、これを従来の貨幣経済史研究の成果にどのように生かすべきか、その指針を示した点にある。遺跡出土の大量備蓄銭・六道銭を厳密に資料化し、その大量統計資料を駆使して備蓄銭は八期、六道銭は五期に時期区分し、出土する銭貨の埋蔵時期判定についての物差しを提供するとともに、中世、あるいは中世末から近世初めの銭貨流通の実態を明らかにしたことは高く評価される。六道銭の研究において、セリエーション分析の方法が諸段階の銭貨流通の動態把握に有効な方法であることを証明した点は注目し値する。とくに中世末から近世初頭における銭貨流通史は、文献史料が極端に不足している。出土銭貨は、いわば銭貨の使用者側の実態を示す第一級の資料であり、この視点から当時の貨幣流通を鮮明に描き直し、さらに近世独自の三貨体制は、東西日本の貨幣流通の地域的差異を、銭貨によって克服しながら円滑に育成したものであるとする結論は傾聴すべきものである。

つぎに本論文の若干の問題点についても指摘しておかなければならない。

まずはじめに、中世の流通銭貨が中国発行の渡来銭である以上、中国などとの貿易関係、銭貨流入の変化などについての分

析が必要である。本論文では備蓄銭六期以降の銭貨の絶対量の不足をデータ上から示すのみで、やや説得力を欠く点が指摘できるだろう。今後その分野の成果との突き合わせが問題となるであろう。

さらに近世の銭貨流通について指摘すれば、東日本における金と銭の使用に関する論理が明快な反面、西日本における貨幣使用の実態、とくに銀の位置付けが不鮮明であるといえる。論者によれば、銀は国内の通貨としての性質以上に、貿易の決済を行なういわば国際通貨としての性格を持っていたという。それならばかかる現状にあった銀経済圏における銭使用はどのようであったのか、あるいは金経済圏の銭使用と本質的にどのように異なるか、さらなる論理を展開する必要がある。

つぎに、備蓄銭と六道銭の分析方法の相違である。前者について埋蔵時期不明の銭貨とその組成や最新銭から年代を確定し、それを基礎に中世の銭貨流通史を復元しようとしているのに対し、後者では年代の判明した資料をセリエーションによって分析し、年代ごとの銭貨流通をおさえるを行っている。しかし、近世では金、銀貨を含めて貨幣流通が成り立っているので、今後、貨幣史全般を研究するためには、さらに金、銀、銭三貨の相互関係を総合的にとらえる必要がある。

最後に表記上の問題ではあるが、出土備蓄銭に占める永楽通宝の割合について記述する際、本論文中では、しばしば「含有量」という語句があげられている。しかし貨幣史の分野では、含有量とは多くの場合、金銀などの品質あるいは純度を指す用

語とされており、その文意が正しく伝わらない恐れがある。今後検討すべき点として指摘しておきたい。

以上、若干の注文を付記したが、これらは本論文の優れた価値をいささかも減ずるものではない。本論文が出土銭貨によって、中・近世の銭貨流通史を復元した卓越した業績であり、それが画期的な学際的研究の成果であることはいうまでもない。本論文は多くの点で高い評価を受けるべきであり、論者鈴木公雄君は文学博士の学位を取得するにふさわしいものと判定する。

論文審査担当者

主査 慶応義塾大学文学部教授・大学院文学研究科委員

文学博士 近森 正

副査 慶応義塾大学文学部教授・大学院文学研究科委員

文学博士 田代 和生

副査 中央大学文学部教授

文学博士 峰岸 純夫

学力確認担当者

慶応義塾大学文学部教授・大学院文学研究科委員

文学博士 近森 正